

# 廟と共存する伝統的フリーマーケットの 観光資源としての可能性

— 台湾北港鎮「朝天宮」と「北港牛墟」を事例として —

## The Possibilities for the Community Service of Traditional Flea Market Co-existing with Temple in Taiwan

— The Case of 'Choten Gu' Temple and 'Peikann Niyoushe' Market in Peikann —

蕭 玉燕\* · 鳥飼香代子\*\*

Yu-Yen HSIAO · Kayoko TORIKAI

(Received October 1, 2010)

We already argued that the temples are assembly places as well as social welfare centers for the communities in Taiwan. Also we argued that the markets have very important roles for sustaining temples as economic infrastructures. We proved that almost all the temples belong markets for their neighborhood areas. Coexistences with the temples and the markets make temples strengthen for their economic infrastructures.

This article focuses on the 'Niyoushe' market that is one of the biggest traditional flea-market in Taiwan. 'Niyoushe' belongs with the 'Choten Gu'. 'Niyoushe' is also assembly place for the people in the community like as a 'Choten Gu'. The 'Choten Gu' and the 'Niyoushe' serve not only for the people in the community but also for the people from nearby communities as well as foreigners as attractive places. This condition made the 'Choten Gu' and the 'market' become strengthen as a economic infrastructure. This market sells variety of things and it sells livestock such as cows, that will makes this market as a tourist attraction. This article clarify these functions of these temples and markets.

**Key words :** Taiwan, cow, temple, flea-market, community service.

### 1. 研究の背景と目的

筆者らは、廟のコミュニティ機能に関する一連の研究で、廟は地域住民にとっての集い機能や地域福祉の拠点としての機能を果たしていることを論じた。また、地域生活にとって大切な廟を存続していくために、廟の経済基盤を支える方法として「市」が重要な役割を果たしている事を指摘した(文献1参照)。さらに、大半の廟は周辺に「市」があること(文献2参照)、廟と「市」はお互いに共存し、「市」の繁栄が廟の経済的基盤を強固にすることを実証した(文献1参照)。

本稿では「市」の中で最も大規模な伝統的フリーマーケット「牛墟」に注目する。台湾では、「牛墟」も廟の近くにあり、廟と共存して、廟と同様に地域の集い機能を果たしていると考えられる。この二つの伝統的な存在の「廟」と「牛墟」は地域住民の集いを果たすほかに、大規模で「市」での商品もきわめて種類が多く、かつ「牛などの生き物」も販売しているため、外国や周辺からの外来観光客をひきつけ、観光資源の魅力があると考えられる。この点を明らかにする事を研究の目的とする。

「牛墟」とは牛の取引を中心としたフリーマーケットのことであるが(「市」とも言う)、かつての台湾農村でも牛の取引市場として「牛墟」は農村生活の中に定着していた(文献1参照)。台湾では「市」の種類は、朝市、

\* 台湾南榮技術学院準教授、教育学部外国人客員研究員

\*\* 熊本大学教育学部教授

夕暮れ市、夜市などがある。朝市と夕暮れ市は殆ど毎日営業しているが、大半の夜市は決まった曜日に開かれる。「牛墟」の場合は、毎日、あるいは曜日ではなく、決まった日にちで行われる。例えば、本事例の「北港牛墟」は、3、6、9の付く日に開催するのである。

本稿では、台湾北港朝天宮と北港牛墟を事例として、廟と共存する伝統的フリーマーケットの観光資源の可能性について探る。「北港牛墟」という伝統的フリーマーケットの利用者100人へのヒヤリング調査と販売者50人へのヒヤリング調査の結果分析を通して、観光資源の可能性を論じてみる。廟と「牛墟」の協力のあり方や、観光資源の可能性としての整備の方向などを地元役場に対しての提言としてまとめる。

## 2. 朝天宮の創立について

雲林県の北港鎮（図1参照）にある「朝天宮」は歴史のある媽祖廟である（海の女神）。康熙三十三年（1694年）に臨濟宗34代目高僧樹壁氏が、中国福建省の湄州から媽祖の神像を持ってきた。最初廟のような形式の整った建築物はなく、「掘立小屋」に安置していたが、1730年瓦葺の建物に建て直し、現在の基礎を作った。その後、何回も建て直して、今日の形式と規模に至った。

管理運営は最初僧侶によるものであったが、廟の信者の増加につれ、1921年に管理委員会を成立して管理し始めた。1973年に政府の政策に応じて、財団法人になり、最高責任者は「董事長」となった。毎年台湾各地からの参詣客は500万人にも上る。現在は国の二級古跡と認定され、台湾中部では最大規模の廟であり、しかも参拝者のきわめて多い媽祖廟と言われている。

台湾中部の宗教信仰の総本山であると共に、地方住民の医療の拠点としての役割も果たしている。1936年に貧しい人達のために「貧民診療所」を創立した。貧乏な人は無料で診療してくれる。それをきっかけに、1977年に「媽祖病院」の建設を始め、8年間をかけて、1985年11月に病院をオープンした。今や台湾中部地方の大規模医療センターである。廟の社会福祉の力をうまく生かして、発展させた例である。開業と同時に中国医薬学院大学と協力して、北港分校になり、図書館や学生寮を建設し、地域の教育や文化にも貢献すると同時に、病院のレベルアップに力を入れてきている。他地域からの来訪者にとっては地域の歴史や文化を知る拠点である。

また、廟前通りの両側にある地方名物の産品を売る老舗や屋台群なども他地域からの来訪者にとっては魅力的であり、多くの訪問者がくる。さらに、「北港牛墟」は廟前から約1キロの距離のところにある。有名であるため、地域住民だけの利用ではなく、他地域からの来訪者も参拝が終わると、参詣客として寄っていく事が多く、楽しむことのできる場所だと言われている。

## 3. 北港牛墟について

台湾に現存する「牛墟」（文献1参照）は、台南県の塩水鎮（開催日付は1、4、7日）、善化鎮（開催日付は2、5、8日）、と本稿事例の雲林県の北港鎮（開催日付は3、6、9日）の3箇所のみである。なお0の日付は休みである。3箇所ともに台湾の中南部にあり、工業化が早く進んだ北部には既がない。

なお、台湾の「牛墟」の起源や特徴あるいは歴史についての文献はほとんどない。筆者らの研究で、大半の「牛墟」は廟の近くで形成され、発展してきた事が明らかになっている程度である。台湾の「牛墟」は日本の縁日のような存在ともいえよう。「牛墟」のある日は、牛の取引のほかに、いろいろな食べ物の屋台や日常生活用品や農産物、農作業道具なども販売される。さらに、廟の庭のようにかつての農村社会の集い場にもなっている。その役割はいまでも残っていると見える。人間関係が疎遠になってきた現代の社会では、「牛墟」は人情味が溢れる数少ない場所の一つといえよう。

「北港牛墟」の設立について、現存の文献「彰化県誌」には、清朝の道光十年（西暦1830年）、既に「牛墟」の運営があったと記載されている。その後、約光緒二十四年前後（西暦1894年）、農村社会の必要に応じて、台湾の各地で続々と「牛墟」の設立と運営があったと言われる。塩水鎮と北港鎮の「牛墟」の設立もほぼそのときだと推測される。即ち1830年から今日に至って、「牛墟」の歴史は少なくとも180年である。なお「善化牛墟」の設立は同治九年（西暦1870年）であり、現存する3箇所の「牛墟」（三大「牛墟」といわれている）の中で一番古いと言われている。

三大「牛墟」の管理運営について、「善化牛墟」だけは民間の経営で、塩水鎮と北港鎮の「牛墟」は公営であり、北港鎮は「北港鎮公所」という役場の管理運営で、塩水鎮は「塩水鎮農協」の運営である。現在実際に牛の

取引をしているのは、「善化牛墟」だけである。しかも取引数は極めて少ない。農業の機械化と共に、農排牛もなくなり、「牛墟」という伝統フリーマーケットの存続は地方政府の考え方にかかってくるといえよう。例えば、このような地方文化を持続していくために、2003年10月25日に雲林县政府は地方の「北港溪人文關懷協会」と協力して、第1回目の「北港牛墟文化祭」を主催した。イベントでは、「百頭の美牛選抜」や「牛墟ルーツ探しの旅」、「力牛の選抜」などを実施した。故郷の文化を大切にしていく活動の一つである。他の2箇所の地方政府よりも、「牛墟文化」を持続させていきたい積極的な姿勢である。「牛墟」は地方文化の大切な一環として、位置づけていくかどうか政府の姿勢が重要である。

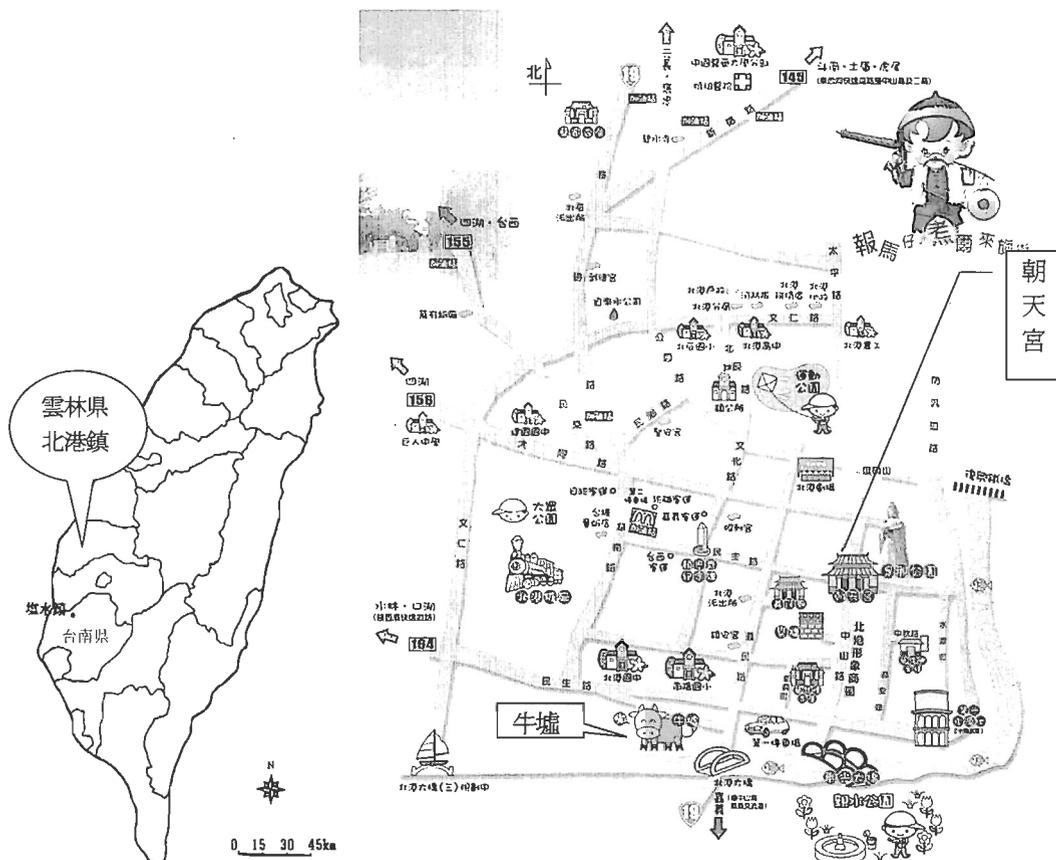


図1：台湾の西海岸にある雲林県北港鎮

図2：北港鎮の観光案内図  
(北港鎮公所ホームページより)



図3：雲林県にある北港鎮の位置図 (google map より)

#### 4. 「北港牛墟」と「朝天宮」の共存について

雲林県における最大規模フリーマーケットである「北港牛墟」の展望について、役場の担当者は、庶民的な「市」を地方文化の誇りとして拡大して行きたいと、抱負を語った。200以上の販売コーナーがあり、いつも盛況であり、伝統的な販売形式の空間は懐かしい光景でもある。

さらに北港鎮農協によると、「牛墟」は早期の農業社会で最も大切な「市」であり、日拠時代（日本の植民地支配の時代）の昭和年間には、全台湾で80余りあったが、現在大きいのは三つしか残っていない。「北港牛墟」は「朝天宮」の参詣客がいるから、いつも賑やかである。地方民俗学者蘇健榮によると、台湾はかつて移民として台湾にやってきたという背景がある。明・清朝時代以来、福建や広東省から続々と移民として台湾に来、開拓を始めた。その時農作業を助け、開拓の助けとなったのは家族のように大切にしてきた牛である。つまり当時の農村生活は牛と密接な関連があり、農村文化は即ち「牛の文化」であった。

現代に入ると農作業は機械化したため、「牛墟」では牛の取引はなくなったが、その他の販売品は残り、庶民文化として継承発展してきたと言える。「今の子供は実物の牛を見たことがない人も大勢いるから、「牛墟」祭りや文化祭を行うとある程度の教育効果が出るかもしれないし、さらに観光にも役に立つであろう」と蘇が指摘した。

また農協の人によると、「朝天宮」の毎年参詣客は500万人ぐらいいるから、「北港牛墟」を発展させていくいい条件になっている。これを庶民「市」として特色化させ、一種の地方文化や歴史的伝承として位置づけ、地方観光の力になるのではないかと期待しているとのことである。

「朝天宮」の設立は西暦1694年であり、既に300年以上の歴史を持つ廟である。そして、「北港牛墟」の設立を辿ってみると、正式の文献記載がなく、約1894年ではないかと推測された。もっと古いときにあったかもしれないが、組織化して管理運営されたのは約1894年前後だといわれている。要するに、廟は「北港牛墟」より先にあった。先に廟があり、人が参拝に来るようになり、牛の取引やいろいろな販売行為が生まれてきたと考えられる。廟へ参詣に来てから、「牛墟」の買い物に寄るか、「牛墟」へ行ってから廟にお参りするという行動パターンが考えられる。このように、集客力のある2か所の共存は相乗的な効果を生み、観光資源の可能性が極めて高いといえよう。

#### 5. 利用者、販売者についての意識調査

一般人の利用や要望が「市」の観光資源の発展の可能性を示すため、「市」での、地域住民の利用状況や要望を以下の方法で検討する。

##### ●調査対象：

- ①ヒヤリング：利用者100名。
- ②ヒヤリング：販売者50名。

##### ●調査の時間：

- ①利用者のヒヤリング：2009年11月29日、朝9-12時、6月21日朝9-12時。晴れ。
- ②販売者のヒヤリング：2009年12月3日朝9-12時。晴れ。

##### (一) 利用者100人のヒヤリング調査について

調査の結果を見ると、利用者は「無職」と「自営業」の人が多く、無職の人は定年後の年配者が多いと考えられる。自営業の人は時間的に自由な人と営業用の仕入れなどの仕事の人であろう。利用する人は30-40代の人が半数を占める。男女別は半々になっている（図5、6参照）。

住所から見ると、「北港鎮」「雲林県」という同一地域の住民が半分以上になる。隣の地域「嘉義縣市」の住民も利用している。要するに6割の利用は同一地域か隣接地域である。さらに4割は比較的遠くからの利用である（図7参照）。「通りがかるのみ」は21%だけであり、30%は「よく回る」、49%が「たまに回る」であることから見ると、8割近くの人には習慣的な利用といえる（図8参照）。大半の利用者にとっては日常的に訪問する場所である。買い物の内容は果物と野菜などの食材や生活用品が多いことから見ると、地方での消費生活を支えていると考えられる（図9参照）。またこの「市」に対する興味について、48%の人は「惹かれる、魅力的な存在」と言っ



図4：北港朝天堂と北港牛墟の位置図 (google map より)

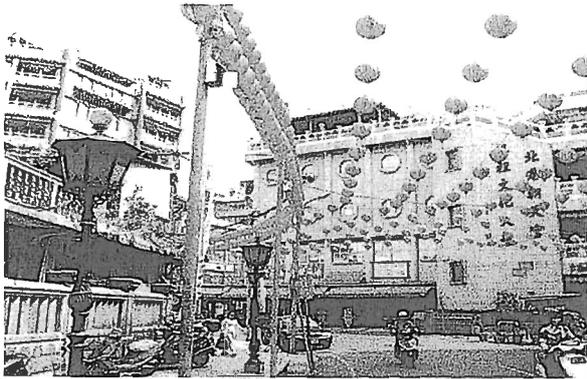


写真1：「朝天堂」廟の付属文化センター



写真2：「朝天堂」廟前通りの伝統的老舗



写真3：「朝天堂」廟前通り (平日)



写真4：「朝天堂」廟庭 (平日)



写真4：北港大橋の下にある「北港牛墟」



写真5：賑わっている「北港牛墟」

たが、69%の人は「地域生活にとって必要な空間」と認めていた(図10, 11参照)。そして、「地域の観光に役立つ」と思う人は45%と「観光資源としての可能性」47%からみると(図12, 13参照)、半数の人が観光資源になると指摘していた。反面、日常的に利用している人の約30%が観光資源とは認めていないことから、観光施設としてまだ足りない部分があると考えられる。

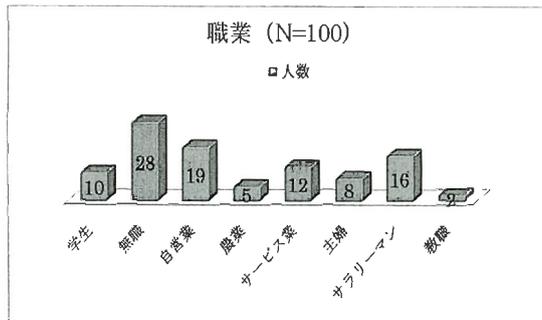


図5：利用者の職業について

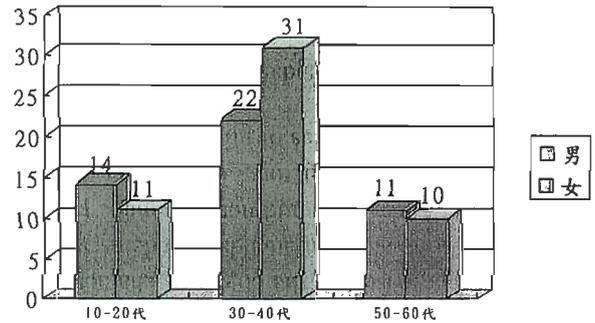


図6：利用者の性別・年齢

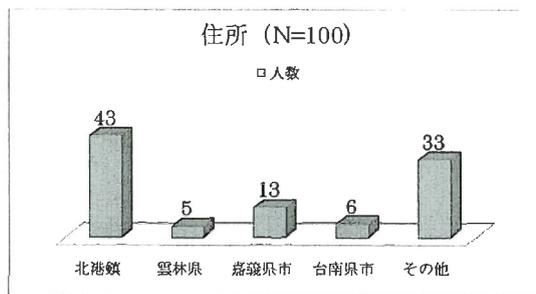


図7：利用者の住所

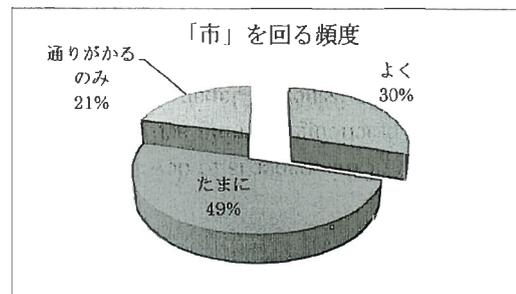


図8：フリーマーケットを回る頻度

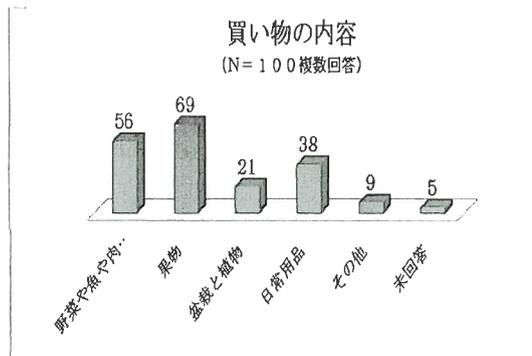


図9：買い物の内容

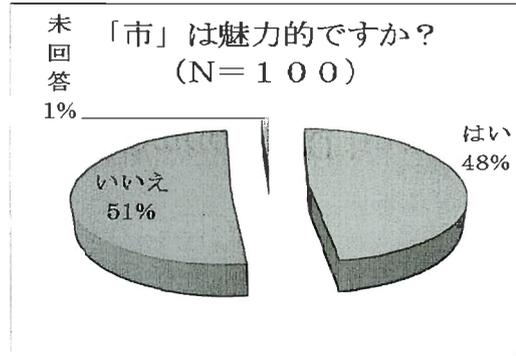


図10：「市」に対する興味、関心

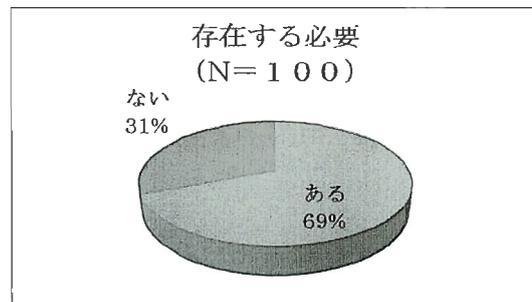


図11：「市」の存在について

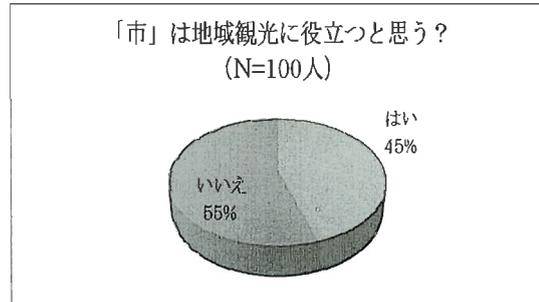


図12：観光に役立つかどうか

「市」以外のスポットで観光客を招く場合、「古跡や廟」と「歴史文化」などが大切だと考えられている事が調査で分かった(図14参照)。廟と市は関連していると意識している人は8%である(図15参照)。観光客を招く企画について、圧倒的に「環境の美化改造」が必要だと考えている(図16参照)。「北港牛墟」は北港大橋の下の道路両側にある。入り口のところは大きな駐車場があり、駐車は問題がないが、大橋の下は雑草が覆い茂っており、不適當である。役場がするべきことと期待されている点は「交通状況の改善」と「歩道の企画と増設」で

ある(図17参照)。品物が揃っていて、安いから利用されているが(図18参照)、現在の「北港牛墟」は大きい車あまり入らないけど、バイクや自転車などは人と同じ道走る(図19参照)ため、混雑のほかに危険性もある。だから、快適な買い物歩道の企画と増設が必要である。

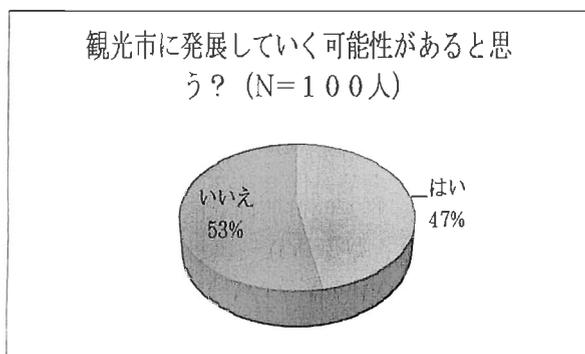


図13：観光資源としての「市」の可能性

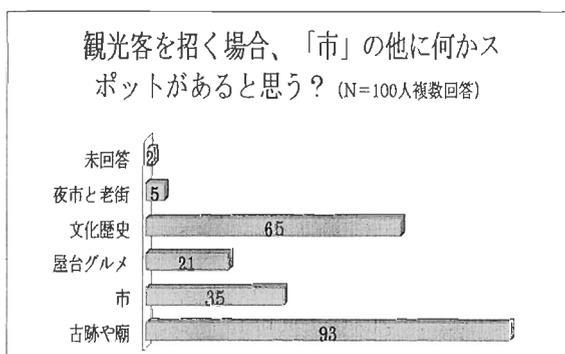


図14：フリーマーケット以外のスポット

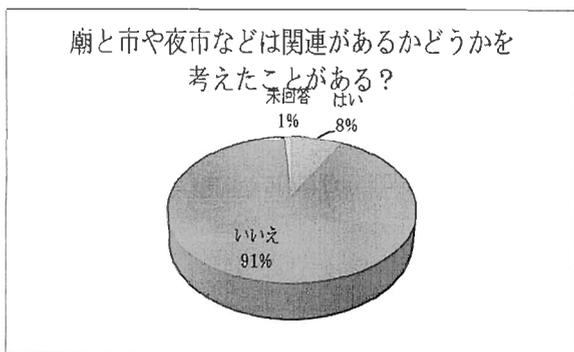


図15：廟と「市」の関連について

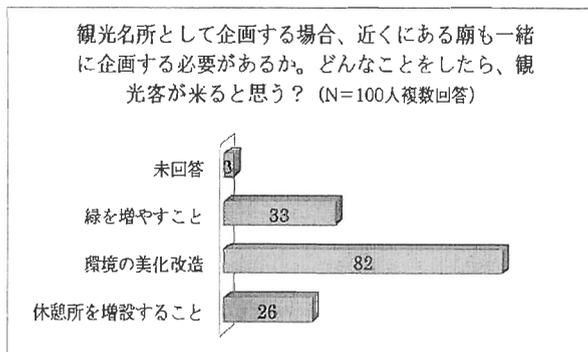


図16：観光客を招く企画

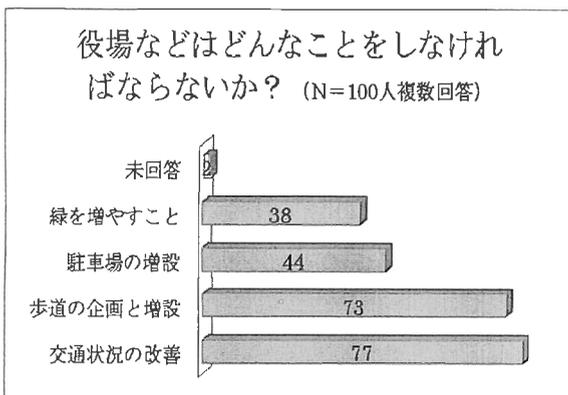


図17：役場がすべきこと

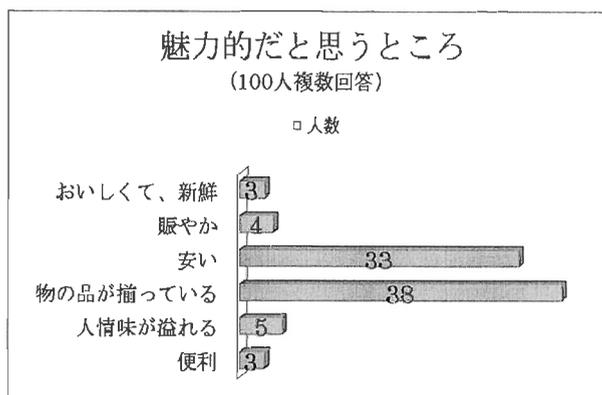


図18：魅力的だと思うところ

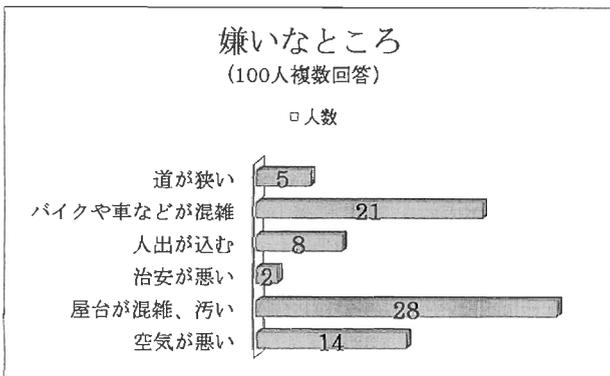


図19：嫌いだと思うところ

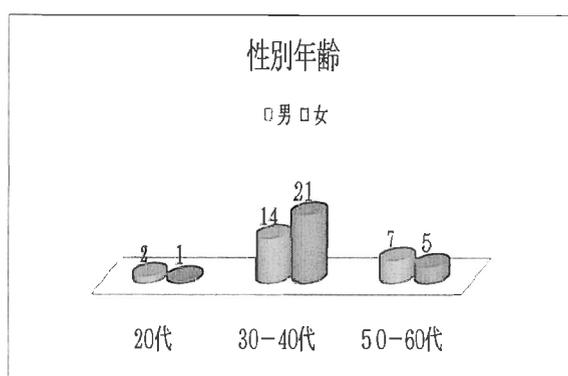


図20：販売者50人の性別年齢

(二) 販売者 50 人のヒヤリング調査について

販売者は 30 - 40 代のほうが多く、7 割を占める。さらに女性が多い (図 20 参照)。住所について、北港鎮民も入れたら、8 割以上は県内の商売人である。9 割はいつも商売に来るという傾向がある (図 21, 22 参照)。ここに出店した殆どの販売者にとって、「牛墟」は生計を支える大切な職場である。

売っているものは野菜や果物などの食材のほかに、「その他」として洋服、雑貨、グルメ用 (特別な) 食材、骨董、農業道具などである。来客について半数以上 62% の人は多いと認めている (図 23, 24 参照)。売り上げ金額について多くの人は「決まってない」と返事したが、大体 2000 - 4000 元 (約日本円 7000 - 12000 円) だと考えられる (図 25 参照)。90% の人はこの市の存在は必要だと思っている。74% の人は市が地域観光に役に立ち、観光資源としての「市」の可能性があると考えており、利用者より楽観的である (図 26, 27, 28 参照)。

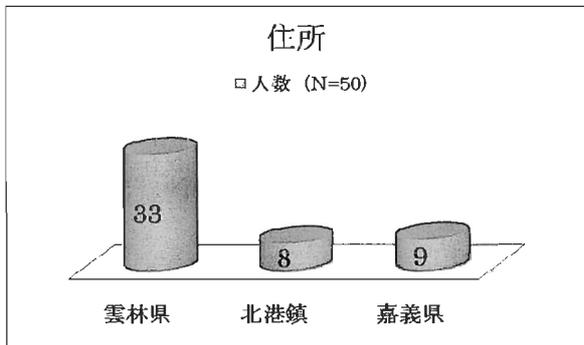


図 21: 販売者の住所

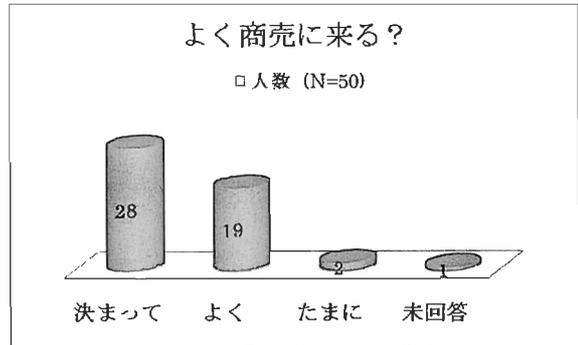


図 22: 販売にくる頻度

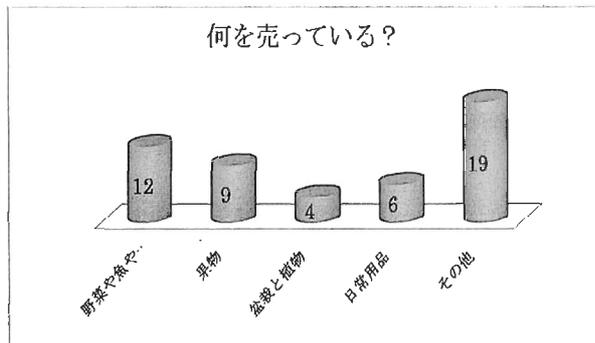


図 23: 販売の内容

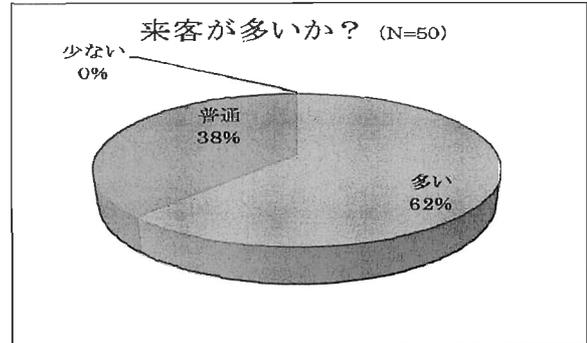


図 24: 来客の状況

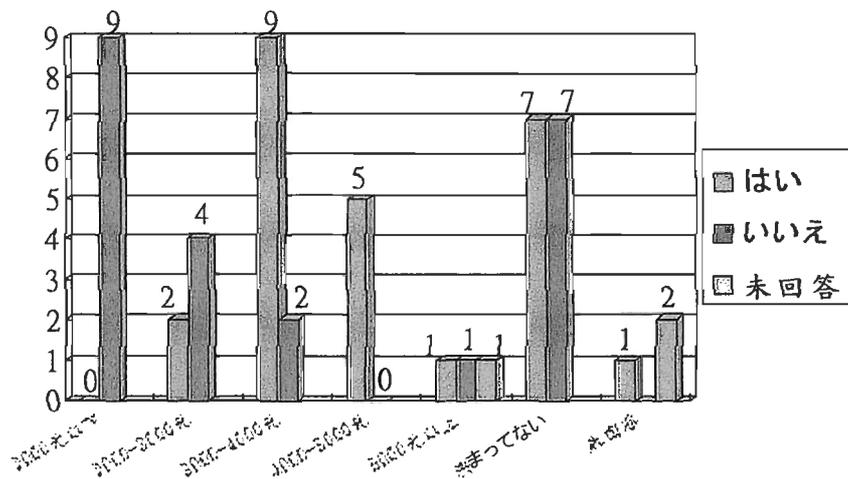


図 25: 売れる状況と売上げ金額

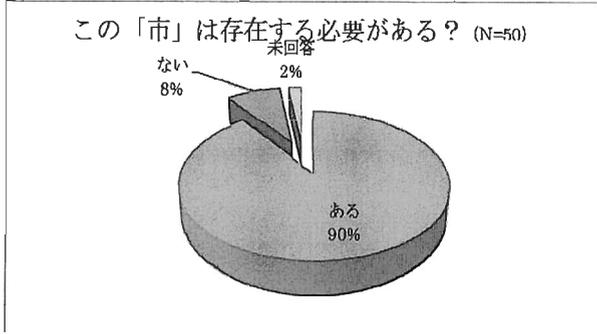


図 26：存在の必要について

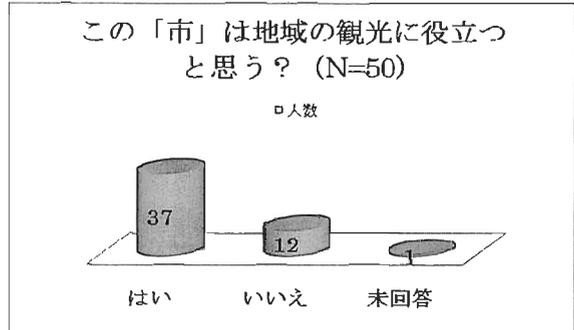


図 27：「市」は観光に役立つかどうか

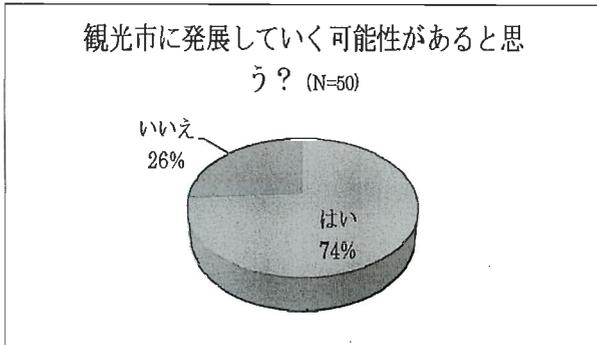


図 28：観光資源としての「市」の可能性

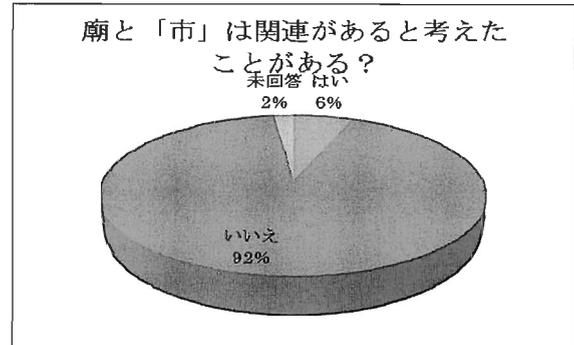


図 29：廟と「市」の関連について

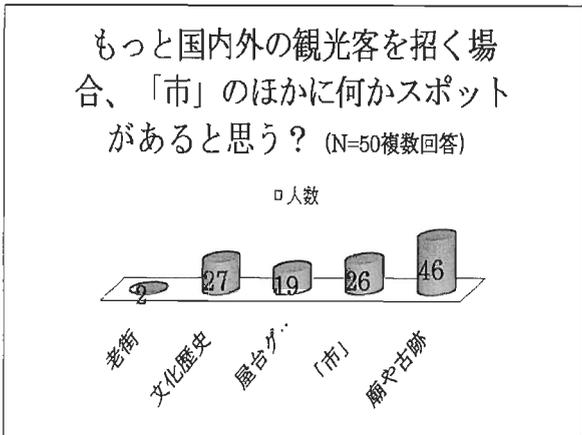


図 30：「市」以外のスポット

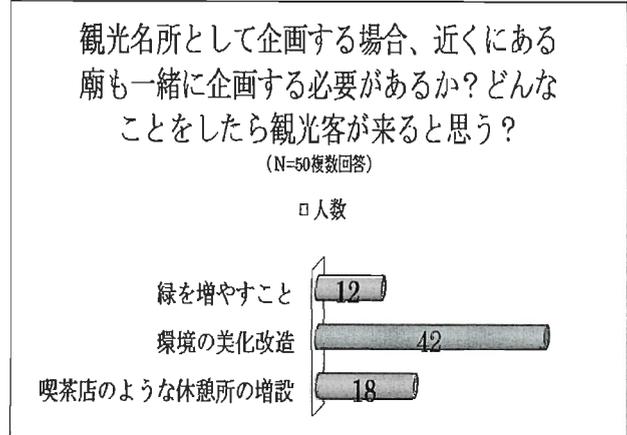


図 31：観光客を招く企画

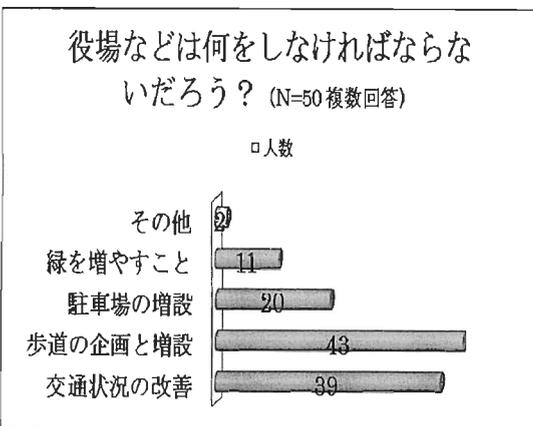


図 32：役場がすべきこと

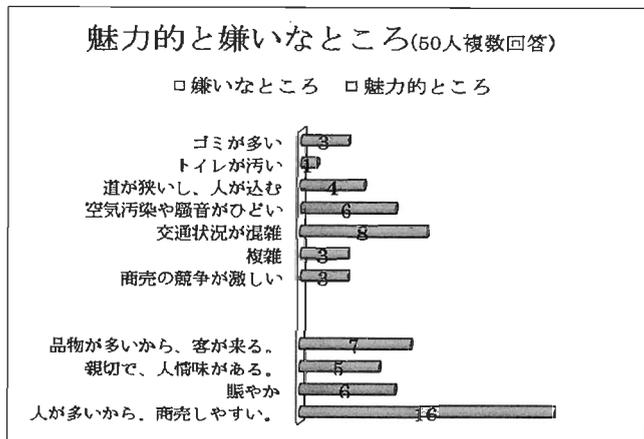


図 33：嫌いなところと魅力だと思うところ

また、廟と市の関連について、関連があると考えている人は利用者の8%より低く、6%しかいない（図29参照）。もし国内外の観光客を招く場合、市のほかのスポットは「廟や古跡」と「歴史文化」が大切だと指摘している。「環境の美化改造」と「歩道の企画や増設」、「交通の改善」は必要だと利用者同様強調している（図30, 31, 32参照）。嫌いなのは、「交通状況混雑」と「空気汚染や騒音」である。魅力的だと思うのは「人が多いから、商売しやすい」という現実的なところである（図33参照）。

## 6. まとめ

「朝天宮」という全台湾でもきわめて有名な廟のすぐ近くにある「北港牛墟」は、他の二箇所の「塩水牛墟」と「善化牛墟」より、集客力はずっと高いと考えられる。地方政府もこの優位性を理解しており、観光資源としてアピールしようと考へ、2003年の第1回「北港牛墟文化祭」を主催した。但し、残念ながら、その後県長の交代があり、政策の変更もあったのか、2回目の開催はまだない。役場の計画の有無は別として、今回の調査で分かったのは利用者の4割は地域住民ではなく、外の地域からの外来「観光兼参詣者」である。地域住民の利用はもともと多いのは周知の事実であるが、40%もいるという外来客は観光資源の可能性にとって大きい数字だと言える。

北港鎮というエリアではもともと300年前から廟はスポットのような存在であったが、その約100年後「牛墟」も開催されるようになり、廟界隈はさらに賑わいを得ていった。そして、毎年500万人という参詣客の少なくとも半分以上の人数は「牛墟」へ流れ込んでいると考えられる。地方にとって膨大な観光資源である。しかも、利用者の約半分が「牛墟」の発展に期待していると思われる。郷土文化意識の高揚が重要な課題になっている現代では、「北港牛墟」と「朝天宮」は既に有名になっているから、大事なものは、調査結果に示したように来客に快適な環境とサービス内容を提供していくことであろう。

今回の調査結果から集客力に関しては、「廟」プラス「牛墟」の共存共栄の力が大きいと分かった。要するに、利用者の要望を取り入れて、改善していけば、「廟」プラス「牛墟」という伝統的フリーマーケットの存在は相乗的な効果を生み、集客力を拡大していく可能性は極めて高く、観光資源としての可能性も巨大であると言える。

## 参考文献：

1. 台南県塩水鎮の廟周辺にある「市」と観光振興について、蕭玉燕・鳥飼香代子、「生活文化、言語文化、教育、体験交流」国際交流研究集会—熊本大学教育学部主催、2009年8月1日。
2. 『塩水國小社区資源調査』、塩水小学校、2007年。
3. 「従牛到非牛の一個傳統市集—以北港牛墟為例」—徐春蘭、台湾輔仁大学社会学科、第38回卒論、2008年12月7日。